羽羅衣　六篇

79、六

へ利9
3869
33

珍羅ゐ　六篇

へ利9
3869
33

歌羅衣六篇序

何ぞれ道も得てハ悦ひ更る
時ち面白からぬハ人情の常
なりけるう中ニ只名をおしミて
古道乃雅人家業の嫌ひ
おもかのおもニ應し　白楽子

へ利 9
號 3869
33
大正七年十二月十六日
室井平藏
氏贈

雅しも[illegible]奥の[illegible]
[illegible]自力さ[illegible]の
[illegible]奥[illegible]花[illegible]景の[illegible]
一[illegible]の[illegible]て[illegible]篇の[illegible]
[illegible]待[illegible]

天保十一
子ノ夏

東都 [illegible]一[illegible]

秋題 衣六篇

折句題 セ ツ カ ツ

内藤[illegible]

世[illegible]

霊扇て[illegible]

渇[illegible]家[illegible]

後[illegible]

落[illegible]

[illegible]

堀江丁	谷泉
了嶮丁	路㯃
カキガラ丁	一[illegible]
小舟丁	如水
弥田	松花
青山	花野
弥田	徳利

浮気ち埒のなき情なら好文や家の守
大門通 金星

膳据へ侍せて子を付ける乳
小伝馬丁 小宇

妻お芥子土器茶に済す家苑
池ノ端 雲牛

文とは辞する寮好む妻まで稚
本銀丁 一家

浮いて廊下へ出ても娼も付けて元気
小川町 龍界

業平から後の川と妻呼びて
小川 鷲鵝

節句にも逃げて髭浅く妻あし
京橋 亀童

梅が扇の黒人妓も柱掛けし
赤坂 完礼

孫香飲り髭の肩を気を付ける毎
深川 一窓

世話やく家鋪老ます杖を塩
神田 五葉

潮梯から出入をそりを切る眼
糀町 [illegible]

埋めやぶかり流水の花影長菊
本町 九畠

棒の行りと生へどろの妻の膳
本銀丁 一刀

売りの上々を書くゐる橋の妻の狗
青山 睡蝶

同 アト二

婦も芸居へ二ケ月ハ留守
本銀丁 二刀

荒らして甚をも旅へ引越し
新川 辰之

留守から流しせ二寸切らまる
深川 九窓

倦て子の泣く二番目の幕　糀町 一安

あらいゝ色よ出語の台　徒利

足音止まる庭まうくらす　小石川 桃花

鈴くおしい解す整ふ子　青山 栗舟

為ま葉擦結句ふ溶ひ火　本郷丁 東丸

冠跳掛

掛く出た雁は羽くる鴻の見　赤坂 三朝

掛く囊為割末細ふ葉棲末　スキヤカシ 亀楽

掛竿に帯緩めり湯の戻り　赤坂 花丸

掛る干大根筆に霜の新　青山 為蝶

掛る三味線八つ口を蔭る様　桃花

掛合を時計に桜乃目に乃ぞ　小石川 米叟

掛迷席糸に書に遠めて撥　池ノ端 垂洗

掛る鯛ゆがく吞足よ好事の数　青山 拾之

は　たつぷ

たつぷりと仕の宿る楢打つさか　小石川 友木

たつぷりと仕立飛脚の風合綱　本郷丁 濁泉

たつぷり文字学に糕口に挽え卜　池ノ端 森坊

たつぷりとお髪の水も醒かねる

たつぷり撲る一つ兜ら子の肥り

たつぷりと風呂も肩越に浴り

たつぷり揚てもく暮る母の恩

折込題　出茶

田舎家出く茶代茶も出茶店

揺茶小姫の出のねる涙きくひ

爾よ立出もとやくと富茶外

流れよ客後出て今なの福茶瓶

口ハ茶師出めは掛けの出布かな

先き〻出る娘紅扇子生根帖

麻裏草履楼々けく立出礼

実出しの何変やらかくへ出茶店

西落ハ粋な出茶屋子帖の寸

五字題　始りく

向ふ裏話る居へ本所川張り

引越しも〻凝文なる人世

張り扇で十ヲ計り打き

本丁	白梅
新川	和光
沢ノ端	中堀
堀内宗	新水
今鹿丁	泰窓
おヽ玉ケ池	亀甲
新川	万丈
青山	阿房
新材木丁	津源
出茶屋	五休
本銀丁	吟多楼
	新水
新川	早来
池ノ端	池鶴
糀町	小浜楼
小舟丁	柏枝

唐からしへ亀の付さ　中八ミ 喜楽

日くらし当りて蕨の出かけ　京八三 亀山

東死擱广も左りの利き　五葉

は　折よく

亀のまゝ流れ 折り この付さ　狭川 亀年

婚礼の済んでお客さ　幸石丁 三宝

おツカアめ浅の拙うし出さよ　童洗

後ろをと向イたる橋田の引かる　中八ミ 了ミモ

引ツかぬく取く浮雲く見込ミ　赤坂 玉文

木綿店かも縞出しの折へ　圓入

冠り　横川や大風鉢

庵もさ川し縄　玉住

折句題 ミヨツケ

其レ実よ時氣連て茄子　松苑

実づくて時分ちやかや菰好子　谷泉

師へ為後おる満下りも蔵の恩　臘鎌

敵の手结婚も一トロ横出酒　木兆

塩よ流る陽氣と蕗虫の核　雲忰

往りけるく咄しも猟くさ　九鳥
遅れ来るよく猿呂じて次々の峯　五来
支度一ト夜は森になる書の旅　蘇坊
段も今田ツ一ツおいて花さ舟　一鉄
杖絶え讀めぬ影なる書夜の夢　一象
自嘲好む婿もてなし運命なる　横山丁 寛哉
婿も纏ひ舟岩の書吏哉　一窓
月　カナ八
内濃の幕も張ツて来る子　鳩京
帰て帰く近くに袖を隠　龍界
秋こそけ往んと[illegible]　五葉
持にツ子庵を澄折るのも[illegible]　早来
生マ薪積て寒くも投げ行し　路球
川手掲根もあご葉出て素　壹洸
特頼哉
為ハ溺み添ひ浮く別ゐ持えし　壹洸
為をおけく蒔く鈎前の[illegible]書　池霞
為金く来出良撞れる川ツくぎ　二刀

名さしの子やに無れぬ猿江の數　可交
名よ志足の經のくよ經へ出て　五音（セトモノ丁）
名もみとり察りく賀出の松の葉　亀年

同　志つり

志つりと足ひく毎の秋の金　一窓
志つりと足る氣よろく力足　亀洋
志つりとみよし押しく寄顔　中堀

新出題　新蕎

知れと麻か蕎新物ハ深る女婚　材居
蕎麦も引けて新は岸へ送るの子　徒利
蕎麦肉揚よまく蔵に新石場　亀山
蕎麦乃徑よ新漬も利く嘉　宇豊
蕎麦もちり新芋の我朱巻られく　九窓

五字題　是ハ志つり

火縄を出さまして鉄炮さのし　花丸
高朝さ毎く流れ沖潮を彼へ　アニモ
挑まき遠かくさ斗りさ　小浪構
遠かく滿りて又手を知らま　恭窓

私ら筆は斯く掛けを娘らさ　金星

同　功者

猫ヶ毛むしりを口て出ろし　三宝

剥り込んて魚をす滴し　（辛々）口山

竹の節ヶ細かく付き　縫惣

洗ひ上けて根継を買ひ　小治樓

まゞいしと薮ゆら迎ひ　半皮

煮も粗らく切り上けて吸ひ　吟多樓

万節好ミを立貨ヶ白眼　一刀

功者　悪ひ酒を撥く言ま勢　玉住

新句類　サ三之

さ浮世しく娼芸を見せる猿は　新水

作ハ安こ百姓も諸稼る種　五葉

四へ先ッ志くむ捷利の味満る故　金星

撥く調子も二上りの乳を酒　（粉川）幸計

酒かはく漾くを露り目て見せる素　徒利

桟橋よ悉ろ子客待んく段闇　森坊

同　カヒ

彭盛次子乃膝を達磨　桃花

厚りは流れつく目さし初る書　亀甲

肩白くして挑納の礼　深川 東我

冠題　今

今参ると見ぬ出次妻の風の声　池鷺

今は桃湯一下山に十二朝　通之

今ハ小猫の鈴の音も従さ寒　深州 於月

今幕張ぬく逃涌も二タ主目　独利

今の七阪目お開てもれる笑　中堀

同　初り留

初りんさ傘見る客張蕉の跡　亀山

初りん不耳白を操る手水鉢　雲阡

初りんて流ト若き小うんる客双の　立東

初りんさ蝶籠持ちて茶屋の妻　宜洸

新出題　好化

蓼を好く深ま二度出の作り眉　野氏

扇下てきらず朝作り葬好りよ　本浪丁 一長

五字題　猪武者

売りに長へ乃札を張らせ　三光寺内　三糸
旅ト云跡とまる山へ連立ち　栄町田丁　田張
日影を外して見當もかまはず
　日前川と長キ　タキ山丁　タキ
遠き後へ湯漬を進め　松花
枇杷葉湯を衝と売り附け　盤桃
明ケて霊のつく角兵衛を庭ひ　亀年
削さ柏をあたりと探かし　一泉

鉄屋の鍋もからりと置み　金吹丁　民蝶
汗子流し数寄屋をまへる　泰窓
　サミミ 芝居一ト勝ち
　きてこ合ひに勝ても負って　玉往

　折句題　アキナノ

星ス もる高く来へ投舟も寄らせて　東鴻
あまきおどきへとお猫へ並らふ下石　和光
秋句や案も奏ちふ常に泪り　種利
青ひら高霧の鏡輝宇　新川　研新

合せとの始一つとなりも家
ね賀るよ京人形も家せて江戸
明けの饒咲く紛糖も家との里
揚てつゐる蕾結実露も満逸て
桜戸咲ふ家も土下の刹海岸
紫肉咲き一怖くりし取く測
明き奢よ和見伊右衛門の粘糠し
整スらく和落きて待て一艮も出ひ糠
旧 ナクサ

住吉丁 明 鋪
養 窓
上毛理 倭 綱
雲 桦
かじ揚 買 上
徳 刹
桃 花
池 鴨

掻らしあくら清よひん清る
若も咽き川結ざつ冷行
何吟りぬ韻裂く多よ廣
法子行よ下ける響ちもの
栗をも剥くる乃き浮の浮雲し
冠題 向
向ひ風法ろて繕ふ節中よ眼
向け盛て土雛乃咲も漂寄る子
向かへ岩当とるを彩む妻急ら出

上毛相生 其 岸
徳 剎
研 耕
九 窓
歌 弘
亀 甲
一 長
繋 雛

向ふへ八景金沢の文字色　下谷 田漲

向ふ行燈の灯りにて更る妻　森坊

向ひ合ふ中へ銚子の蝶二ツ　古周

向ふさまに先へ黒くる角も客　石耕

向ふでのらの知らせ流して詰回へ出　五来

門　並

並び居る狗も一ツ並イ下戸の客　路蝶

並ぶ雛の蓋に水屋の湯も浪　九嶌

並北篤る菊も詰手紙に懐る妻　ナカチ町 一瓢

並立ちて返し毎さる次珠数　一象

並ハ床の色繋附く火掃除　秋田川 路糸

並居て踊る篠も詰雨の利　新水

折込題　月姿

妻恋ふ月見の膳月も細イ指　浅草田町 鵜二

夕菜活ふ旅も月立ツ家人件　路糸

採く詠る月も醒て井に家回路　石耕

清香も二度月篠の梅窓更　寛洗

菊ゆるし大窓更小窓ゆる有月楼　三十ド丁 鯛三

五字題 お様

きぬ〳〵の御が迷つくありき出
むりしの夜し語つて吹よりせ
楚しくさ出の番頭をくどき
音頭ありとく師匠に嫌はれ

同 引ッ張りだし

婆さんをせんりよ渡ひたいが
翁ト為り孫髪を亀はし
猫乃八ヶ気が張って其寄る

亀年
上州 奇玉
亀山
吟交樓
アンモ
民聲
中八江 糸工

一枚 板が 盗え切を縁へ
集め アキナハ 楚末も
多く枝 纏手茶屋

折句題 エキト ミキト

採は向窮屋に宴興
擽る子弦巾三ッ極ありき艺
に五冊綴へ室て葉を解く学座
敵見えく営婆へも加りて縮ッさ子
メてゐる末石鳴らくさ子弦無る音

三糸
玉住
青山 覧波
路蝶
池鶴
彭蛙
松花

餅搗け鶴小風圓に走らる　何耕
樅くゝる切餅持て冬籠の子　泰窓
信公と来て讀む巳の酉の節　徒利
霜枯や黄ばみて澀き墻藺し　綱三
海老屋で瀧の出入利根の鯉　（カメシマ）兵士
江戸は言氣子も張り解けて年　〻棠枝
襟子透き物も時ぞ見るの給　（永田）松羽
四五騎の木咲冬の庭子だ　研耕
住吉大急ら伊勢参へ通りて　谷泉

日（シヤウ）

恭くりと合ふ縁の絲捧　口山
涼しみふる麻裳田甫面　亀文
墻せん蟹への中の肝諫射望　丸窓
獅子たゝ作く革鬘犯波　吟多猿
酔をまつ處も蘆場へ多　明猫

冠　顯　銀

銀鯔と思ひ猿は採て鍋も養ヒ　重星
銀兄まるの鬼も曲ゲて猪ふるぬ子　（十八ミ）系竹

猫同婦らぬ子双六手板ゟ更て　一長
猫のゝ這入る日ハ熊手持て客　五来
猫萬話論の見ゆる手水鉢　竹田 安枝
猫狂ふの肉ハおぶ出る壽子　亀ミマ 貫八
猫家ずきに母の猫出る子の杖　画洗
猫の下このゝ這ふて子の気世直し　雲艸
猫萬にあんぶる彩广と乳母の襷　泉工
猫見を呵る婦象を持添へて　一泉

月　真ノ中

真ノ中結猪口も数子並く従ヒ猪　路景
真ノ中ニ入海出来る安硯　森坊
真ノ中へ串も料理の大根鱠　画洗

折込題　見本

風薫し人足遠し小来の錦ふ形　亀甲
三ケ月も安らされ見ゆる冬木立　石斛
居りる見揃幕近く知らせの床　カメミマ 益雉
踏さ消を附木手深跡見る出口　池鶴

五字題　鬼

仕舞ふ見世を側のかり寐して　二刀
やりくりでも色揚ハさせぬ也　寿山
相手をおつちやアメ也　本所小梅 左言
数の子売りが親父ゥ寿り　之室

日　焼しけ

男の子がお蔵ゟ落ちる　ア乙モ
やりとれぬひて於留ゟ結ひ　寿山
超路も一派にみかる　田張
早く新を出してお出テ　中根

エシキト
気解れ際どく浴る涸の杭　玉往

折句題　コヒタ

小絹蔵へ寄せ代寄せる燗　路鎌
臣膳を密く寸たる花見鍵　一泉
小指乱まふたまでも撥挫れ　エサキ 完牛
臣膳へ操酒引ッかける娼　修総
今こ秋酒ゟ年月も落て出手　金星
おろりと雪れ揺もおつめり　無士

子ハ恵比須彭銅御さ笹
小言トたらく引窓孔雪
出るの川々子も捨て置棋
團つゝ下石も捨て置る箱口
旧　アツカリ
撚ひよ子ほり氷りの穴ヶ踏んて
廣シの陰夜答手蝸て数志ゝ心
黒スふ志きう抛んて延ハ紫霞し
洗ひ發霧手槌手かゝもも気

一鋤
寄玉
アモ
池鵠
一
亀年
谷泉
一刀
杦（ちんむ）菜

作句ゝよ所に羽根中ほりかけ結
綱をと千波納ふ藻の漁も風
淨雲イふ連宗旋落て弥
軽帰足憲も錦手蝸とりけて
鋤鐘て継ひ来るはの念遅
あゆみ々浮て来ら々深も安履削
晴せ々浅つと親く子結彭物済
黒ふたハ六ツの孫との紫淳報
朝詠つ待ゝ右衆居へ掛樂へ湯

画洗
口山
栄枝
吟窓鐘
徒利
泰窓
音洗
中招
象工

庵會はまきれにも雅新器　徳利

辞題　後

後名へは向安け條に脊負袋　木丸

後ろこつゝ蔓て伐らんと隠さ踊　採扬庵

後生と給ふ乾杯に福も亮の画　鳴彩

後ろとつくり粉織みしら姫の安比　網三

後き辞宣嘉もかしい元紹遁　雲琳

後見んも在作新了当さに打ち半日ふ渕ゑり　杉蘭

ふくろと書玉磨にすすよにて　画之

ふくろと素の香包む居籠帯　亀甲

ふくろと押絵の継乃縁加減　左云

ふくろ新居す霞細の締り較　河耕

折込影　押輪

条映し隣へ移七押へる手　津浪

吹つかける押手も遠ひ移りこの人　石耕

帝と押せ九乳粉絵手集ゐ移り　左云

猪に負て押しかけまするすの渡れ船　左宮

目移りは若子多き野ゝ道一ト押揺　イチロ

五字読　若々し

旨く炊かれたる湯のゆけ　奇玉

月乃夜振て涼しき　亀山

究子屋乃亭主も猿ち　五葉

同　晴を活

さすが花にて新生り眠り　三宝

轉遊さんらさしゝ　夕キ

藪の風も涼しへ吹込　松花

花圃

朝顔は妻子あらく逃込　玉住

折句題　ハカマ

掃除してゆる魚屋　徒利

母も活顔を隠して袖蔽　空石

茶碗出して　五味

肌ぬいて子は隠して気　繁雅

八幡マアよんで　中八ゝ　旧窓

傘に付く母　い　酒月

励む子敷手も出す肝に汗　無士
花見に法度は子奈る町風俗　五菓
同
囲まるゝ見世縁絵に元ト出さ子　嶋二
愁を娯見せ見世のまさと白く襟　イチウ 泉工
壁ひ連鈍近へ透門趣向妙　蹄嬢
始との間子見えま行る書於白魚賣　口山
等等うも組敷等蟇く清書　丸窓
襲御子見せる手際の嵩どが松治

誓籠ゐて戻さぬとら娯遊女で　同の
斤佛居て見すぞ以と妻仕舞笑に　森房
加茂ぬる見て紐け競うも鹿ちの子　春窓
格子戸も塵ろく嫌矣の帰りに書籠　松花
髪仕舞ふ取屋らる字を操んと紙　栄枝
借らゝ里見んを読む尚大光人子翁　一家
冠 験 光
光きへ折くを湯へ世のもとに流と　亀甲
光の一ふくと粉まぬのく津く嫌雲　糸州

先へ鉢請解きさと宿ハ雅児て入来　池鶯
先き／＼第入もせ雛も妓子なりし　一長
先き／＼出る公卿合ふ遊世の刎　澁芽四丁　一賀
先つ陣乃出富櫓乃将軍　い　秀八
先へ條鉢蝶子ハ年ふ子ハ涼き　亀之
先き／＼顔ハ杖ハ氣の毛し嫁　本丸
先つ前後者も席も直きたから　和光
先き／＼第下手をゆるつと香利法　室星

円

まる／＼

まる／＼掛地廣くれ取出床の間　一協
まる／＼と手も書く筆の買物志　土バシ　仙鳩
まる／＼と縄結鉢釣く拭く眼鏡　亀山
まる／＼と糸縫糸を結継ぐ紐　盃洗
まる／＼夜着を寝く甲斐ふ志る酒氣　亀丈

形込　和章

熊を知えて兄よ嫁の家の付く子　徒利
離幕よ和鉢番句の氣も張って　亀しま　清賀
疑る手拭和年よ家も搾ひ　土バシ　玉兎

兎すやの和役待羅に亂に結て
暮しき長く袖の揃婆子

五字題　ねつまし

浅川くあさ迄し枝の下て兵ろ
名残をえよん襷を門の槭け
流りも出稼ぐ畑を好き
住ていて機織の茶下りさ
寛恵を賣る者と切りを蔭し
情揃て兵我酒屋を打き

荷耕
鉄暑
アニモ
タキ
壽玉
春乘
三宝
一刀

日　芽を吹く
見ても好もし彩乃孫乃出来らい
内乃株を見あけましさ
梅の香りて冬深くが込合ひ
楳乃雛を吉個の飾り
かこもしかくちある鬼も
藤消て本揃夜具

折句題　サカツ

淋しされ濡れく風を寒出く

樹行
雲艸
奇玉
因孫
玉住
糸艸

花見かり幸蝶の名を付るに花様
造作も掛り始に突ッこむ人
蕊餘掛け雨紙し裏の尖イ
櫻様　留ふうち菫　摘む路
貝よひ出して傘　ありて雲ふ雲あふれ
むし雪お青気毎猩々振んにて
ざくりハ系甑切　切する入梅の藕
酒まうひ行やく拵て雲を見
櫻も蹙りハ帝まて子飾連ね永て

壺洗
鳩二
奇玉
明楯
亀年
秋田　蝶更
夕キ
路蝶
重星

同　八メ

毎朝自筆て仕舞ふ稿の綴
算の先それ那ア家子飾堆
むかしもとを咲く糖気し

冠題　別

別りえ居る梅々わるさし実の入て
別り下水イ十六盤釜に引くたなさ
別る筆の鞘を扎て休返し
別り海老の出来八ノ字に反する

一刀
採房
一長
新川　早床
水耕
無士
吟子

割る新刹くは東石乳も身を上けて　一泉
割る玉子からり小皿に移しさて　池鶯

月　ちよ〱

ちよ〱と水に毒月の筆おとし　泉工
ちよ〱と薬煉子に出る入梅の星　亀甲
ちよ〱とお細工箱に粘巻閉　五来
ちよ〱と据ゑる夢の枝に灰　亀山

折込　香子

菓子は奏ではロ取の都香　鳴景

見初る子は忍出土佐の大香毛　谷泉
蔵は縁りく子結各う多後抱　和光
王子へ上る都に通し香屋筆　一賀

五字鉄　由わ

暮をはるゝ下タで寝の浦毒　アンモ
不扣庭の交渡金を出し　柏枝
狂入猿は月底り付くさ　秀八
万箱詳りて黄かに延ス攻し　松花
久助乃まゝッ子まへ圍る　橋月

何是でよし

海老屋て費き附床をたたみ

我かこの度出を捨て床

捨の先きて札をさし込

かきさ出しく釜入りを待り

折込　横く出川く鳥綴の

蟹買ふ子

折句題　カッチウ

故屋涼し月よ布目の移り影

仏菴　三宝　徳利　恭窓　玉住　娼二

門ト　せまし造りも屋へ牛の手なく

緊捨て書湯ゆりよ後ろ櫛

嗣宵よ伺て丈々待落故きり

故きり家を付け門源よ肉取き

誑る子不附算外る乳母の口

かくしよ書定なあく史けて延

ゆる子話連よさかく乳母添ふ手

鉄線留不付乳内美のウロノ玉

都てら好つくる子と家取る結口の数

臨濮　泉工　金星　雲草　三条　督水　巴丸　酒月　一泉

飯るまでつゝき泊り給の遠つゝ子　一賀

かくさる毒あるハ撈えん中ヶ底ゝく　盃洗

揺く下と下右もむちうきぬ氣　一刀

疵て本當使ひハ暑しき手雪　嬌二

借る盃案手太鼓千後る向　谷泉

月　ハ　夕

羽織帰へ抱てもつる縁　新五

ハイと緒んて打くる子の帯　池鴇

方角ゝ吹て出ゝゝ漬茄子　三糸

羽織を纏ゝ急む夕立　立言

橋詰の風子たまぎる小間畫　花丸

浜松急く谷本のぶら　斫耕

外流に氣も旦那来て毎　睦蝶

送ふ子手早く抱よる釉　丸窓

菓も家買て続くる糖菓和　吟多様

端しく床机乃立ち寄る子急　二刀

裃を嫁乃急む雲の手　新水

月　サミノモ

裂く肉出て濃茄子の香る艶　無士

山王氏子年寄に操る後　一泉

酒つけて文箱庭へ持出て　五味

漬ひ床ヵ其種捨てゝ覚る蔭　橘嘉（日奈八玉）

酒ハあさしみ夕河岸に香る浜　木丸

酒も添しハ霜ざけ呑る也て　柏枝

花満ちる帰も振りに気を操る趣　菖雄

誘ひし族して二番目に操る友　新水

冠題出して

出て数折肉おろける奇旅丸　二刀

出て安出ると佳舞に芝居咲　一長

出て六仕舞に楽しみて子に栽　中根

出て夕留小袖さし咲梅の香　徳利

出て千代梅に家業も家の指　口山

出て梅又とり込に加へ生　其峯

出て土産に家並次厨弁の飯り　路嫌

冂　振

振つこのえる及すし為蝸の風情まて　東我

振る挑灯ゝ舟もちら川裏ゞ　寄玉

振りわけた番ふ家根舟のかいぐ斈　秀八

振りこゑて出んゝと高くゝ見向けゐ猫　森房

振り向て役人支度の出際礼　花鳥

折込題　抱並

抱合ふと並べて是は遊人抱茗量　芝大八之　魚洲

冬の抱ゝ幸周ふ並つゝふ夜役州　亀甲

長柄傘承ゝ宮ふ並ふ抱てん下　亀年

大で度出抱ふやつと並つんさ子　呑波

並んで連寄小背も寄抱　壹洗

五字題　手ゝ汗

連しの藝者は口を掛けらる　八丁堀　對丸

清新道さん茶屋はありまた　安歳

店中で圓をのらり呼まれ　之宝

茶さしを守トかうえ清めゆ　赤坂　志丸

長刀ナど袋へ入きられ　亀山

色んさま庭をそんろう遊されて　寄玉

お花さへ仕舞さ並つをおもしよ　池ノ端　十寸庵

親乃命をおしんで学びの道　一賀

子ハ正直にかくしてを云ィ立　泰窓

同　多居ヲ越し

お座敷も呑んで氣の見え　松花

不孝な息子の所謂造に旅　八丈丁　雨暁

母のつゝましさ調子をあわせ　回張

明くたゞ内へ入ても合せん　三条

同　お新け

楽上けさおまんま持が進之　夕キ

足を洗ってからの嘲しさ　三年ぶり　意月

おりきさ男子お宗旅を頼り　鳴京

あねさまの恩でも聞て好きな次　根岸　奇玉

おんぶして好きて数路を覚え　洞江

多居を越し

湯屋を焼けかれ

おくのくらで出世人　玉任

柳樽六十六篇終

後篇追て出版

水戸御免
日本一家
小兒司命丸　十粒入 二百五十八銅
壹粒二十五錢

第一驚風　五疳　癲癇　脾疳　痘瘡
麻疹　痢病　腹痛　霍乱　中毒
勞症　疳勞　其外大人小兒一切病ニ吉

調合所　水戸川和田　高倉氏

江戸賣弘元店
書林　十軒店　播磨屋勝五郎